

令和6年度 第2回岐阜県社会教育委員の会 議事録要旨

1 日時 令和6年8月30日(金) 10:00~12:00

2 場所 岐阜県庁 17階 1701会議室(オンライン)

3 出席者(委員の現在数14人 出席者14人)

<委員>

天野 知子  
井上 吉博  
岩田 睦巳  
兒玉 哲也  
酒井 茂  
猿渡 真里恵  
清水 康孝  
裁 昭人  
堀江 弘美  
益川 浩一  
馬淵 浩史  
森下 珠美  
山本 真紀  
米原木ノ実

<事務局>

環境生活部長	渡辺 幸司
県民生活課長	森 信輔
生涯学習企画監	安藤由美子
課長補佐兼係長	片岡 留美
課長補佐	永田千奈津

4 報告

○議長選任

事務局：議長案を提案する。岐阜大学、益川委員にお願いしたい。

委員：異議なし

(1) 令和6年度、7年度研究・協議見通しについて

○事務局より説明

益川議長：第1回の協議では、ここ数年続けている地域と学校の連携、子どもを核とした地域づくりに社会教育がどう貢献できるのかということを中心に深めていくとよいというまとめであった。子ども基本法、こども大綱に基づいて、県や自治体もこども計画を作成している中で、地域と学校の連携の場面でも、子ども・若者の意見表明や参画が大事である。また、子どもだけでなく、保護者・PTA・地域が主体的に当事者として参

画していくことが大事である。このような意見を受け、事務局と相談しテーマを決めた。明るく、未来志向の言葉も付けた。

今後の見通しとしては、関係者にアンケートを行って実態を把握し、提言をしていく。具体的な方法については、これから意見を出し合っていく。出口は、議論を進めていく中で変わっていくこともあるが、小冊子を作成する。ご意見、確認事項はあるか。

委員：異議なし

益川議長：このテーマでの活発な討議を通して、現場で頑張っている人達の役に立つような成果となるようにしたい。基本はこのテーマで討議を進める。

## (2) 議事（事例を通した研究・協議）

○事例発表 羽島モア学園 絆会議の実践を通して

発表者 羽島市立羽島中学校長 酒井 茂 氏

益川議長：審議題が、社会教育における子ども核とした地域づくりの未来である。子どもや若者がもっと参画していこうということを審議していく。羽島モア学園の事例は、学校運営協議会という手段を使い、子どもたちが積極的に参加し大人と一緒に学校の取組や地域の良さを理解するところから始まり、そして課題解決に向けて何をやったらよいかを大人が決めるのではなく、子どもたち自身で決めていく。そして継続している。先進的な事例である。

ご意見、ご質問等いかがか。

天野委員：各学校の学校運営協議会に地域コーディネーターが入っていることが素晴らしい。社会教育の立場で学校運営協議会に参加している人がほとんどいない。社会教育委員が学校運営協議会に入っていく必要があるが、どのように参加していったらよいか。

酒井委員：だれが社会教育委員なのかの把握はしていない。羽島市に社会教育委員がいるが、校区に割り振られているわけではない。羽島中校区にいれば、来年の委員選出で考えた

い。

岩田委員：そのとおりである。羽島市の中で社会教育委員を校区で分けていない。情報を学校運営協議会に提供するとよいと思った。

益川委員：学校運営協議会委員と社会教育委員を兼ねている人もいる。情報共有できれば、学校教育と社会教育の往還がより積極的に行われるようになる。社会教育委員や地域で社会教育の中核を担う方が学校運営協議会に参加できるようになると、学校と地域が連携した活動がさらに促進される。その仕組みをつくとさらによいと感じる。

D Xの活用がよい。タブレットを使った通信は、保護者や地域の方にどのように伝わるのか。

酒井委員：子どもたちは一人一台タブレットがあるが、持ち帰れるか否かは学校により違う。持ち帰り、通信を親に見せていけばと思うが、広がっているという感じはない。絆会議では委員へ通信を紹介しているが、その先への広がりには苦しいところがある。

益川議長：オンラインを活用し地域に広がるとよい。情報共有が大事である。地域に、家庭にと広がり関わることで仲間が増える。また、取り上げられている生徒会長等も地域・保護者に見てもらえると思えばモチベーションあがる。意見として受け止めていただけるとありがたい。

清水委員：積極的に学校運営協議会を活用した素敵な取組である。子どもたちが学校運営協議会に参画していることはなかなかない。先生方の準備、子どもたちへの事前の指導等大変なこともあると思うが、子どもたちが地域の方と一緒に活動しておりすばらしい。本巢市でも、教育の中で様々なことを「当事者意識」、「自分事」としてとらえていこうということを大切にしている。この取組は子どもたちが自分たちの地域を自分たちでよくしていこうという当事者意識、将来、地域をよりよくしていく一員として意識の自覚の機会になる。参考にしたい。各小中学校に運営協議会があり委員が重なっているのはよいことではあるが、煩雑ではないか。連携の難しさ、また成果があれば教えてほしい。

酒井委員：会議も多く、労力が倍になるのではと思い、全体を1つにまとめる提案をしたこともあった。しかし、それぞれの学校で取り組むことと、校区全体で取り組むことは違う。住み分けしながら進めており、同じことを2回やっているという感覚ではない。特に絆会議が入ってきたことにより、子どもを中心に置き、子どもの意見に耳を傾けている。担当教員にも生徒にも準備が負担にならないよう工夫はしている。目的は違うところであり、両方成立させようと頑張っている。

益川議長：学校運営協議会は学校に置かれているが、地域づくりの観点でと考えると中学校区で取り組むことは1つの手である。

裁委員：非常にわかりやすい取組というところが、みなさんに共感を得て広がっていると感じる。何か新しいものをと考えがちである学校運営協議会の中で、もともとやっておられる活動を考えながら、無いものねだりでなくあるもの探しで取り組んでおられる。下呂小中合わせても規模が小さいが、モア学園の規模は大きい。それぞれの学校でももともとあった挨拶活動を、モア学園の挨拶活動としてどのようにして仕組みを整えられたのか。

酒井委員：各小中学校それぞれ行っていた挨拶活動をお互いに紹介し合い理解し合う中で、中学生が小学校へ行き一緒になってやろうとしたことがきっかけとなり、協議会の人に加わって挨拶運動を展開した。今までのものを上手に使いながら、形や見方を変えて地域の取組にしていった。今までとの違いや新しく加わったことを説明しながら、見方をどうとらえるか、地域とどうつなげるかを考えた。

裁委員：もともとある活動に、どのような言葉を添えて、今これから新しくやっていくのか伝えていく方法がわかった。下呂市でも活用したい。

益川議長：地域の良さや課題を一緒になって考える中で、もっとあったかい地域にするにはどうしたらよいかを考え、今ある挨拶活動をどう広げていったらよいかと考えるプロセスを経ていることが素敵である。大人からあてがわれた活動をこなすのではなく、子ど

も自身が大人と一緒に考えてきた活動であり、子どもたちが主体的に地域に関わる切り口になったことが素敵である。ある意味、学校の特別活動やシチズンシップ教育につながる取組である。

森下委員：自分たちの地域では、10年前から中学生が小学校へ行って挨拶をしているが、コロナで中断。最近復活したが参加者が少ない。第三月曜に中学生が2つの小学校へ挨拶をしている。生徒と先生方に加え、まちづくり協議会や各種団体、自治体にも協力いただいている。なかなかうまくいかない。先日は挨拶の標語を小中学生からだけでなく、公民館だよりに入れていただき地域のみなさんからも募集した。のぼりを作って活動もしている。挨拶を地域へ広げようとしているが、継続が難しい。発展していくにはどうしたらよいらうか。

酒井委員：下火になってしまうこともあるかもしれないが、挨拶は大事ということを繰り返し伝えながら継続していく。第三月曜日にと活動を行っていること、まちづくり協議会など地域とともにやっていること、公民館だよりにも入れてというように地域に広がっていている。学校だけに収まっていないところがよい。学校運営協議会のように学校が主導となると、学校が中心になってしまう。地域の人が当事者意識をもって自分たちの地域をもっとよくしていこうとみんなでやろうという流れになるとよい。学校が中心であっても地域の協力得られれば活動が広がり継続する。挨拶は取り組みやすいが、広がった、できるようになったという感覚がわかりづらいところが難しい。例えば、ゴミ拾いは拾った量や地域からごみなくなったと見てわかりやすいという話にもなった。挨拶ができた、温かい言葉をかけることができたとどれだけ意識できるかが、次へのモチベーションにつながる。

益川議長：挨拶を通してみんなが温かくなり、温かい地域づくり目指すことが目的であったと思う。挨拶は手段で、温かい地域をつくるのが目的で、挨拶を地域づくりにつなげていこうという意見が子どもからも大人からも出てきて、その取組のツールとして挨拶が出てきたように思う。単に挨拶だけでなくあったかい関係づくり、そしてそれに取組んでいる自分を肯定できる。そのような取組であったように思う。

森下委員：子どもたちから、もう一度挨拶を見直したいという意見が出た。子どもを中心ということを考えていきたい。

米原委員：福井県勝山市に旅行で訪れた。道行く子どもや大人、中学生もみんなが挨拶の声をかけてくれた。自転車で追い越す生徒が声をかけてくれたが、歩行者は安心する。衝撃を受けた。子どもたちは、学校などでずっと評価をされる環境にいる。しかし、この様子は、他からの評価を受けるためにやっているのではなく、当然のこととしてやっている。普通のこととして街中に染みわたっている感じがした。長い年月の積み重ねがあるだろうと思うし、旅行者とわかっていて声かけするのは、「ようこそ勝山へ」といった勝山市民としての誇りとプライドあるのだと感じた。本日話題になっている挨拶と関係あると思った。

益川議長：最初はやらされ感もあったかもしれないが、絆会議で地域のよさや課題を考える中、

子どもたちから意見が出て、あてがわれたからでなく自分たちがやってみようと活動が広がってきたことがよい。それがさらに高まると、挨拶が普通のことになっていく。

兒玉委員：テレビで不登校に関するニュースを見た。小学校何校かが一緒になった中学になじめず不登校になったというもの。羽島中校区も3つの小学校が1つになる。モア学園で小学校と中学校のつながりはあるが、小学校3校の横のつながりはどうのようになっているか。

酒井委員：小学校の横のつながりはなかなか難しい。モア学園で各校の紹介をするのもお互いが知らないからである。小学校で同じ足並みで指導できれば、一緒になった中学校で生かされるし、小学校の段階で交流の機会があれば不登校もなくなるのではと思った。新しいことは時間もかかるが、小学校同士のつながりを相談していきたい。

兒玉委員：小学校低学年は、自分の校区が地域と思っているが、高学年になったときにはモア学園の校区が自分たちの地域といった意識をつくっていけるとよい。

益川議長：絆会議が、小学校同士の情報共有の場にもなっている。いろんなタイプのつながり、大人と子ども、子ども同士、小学校と中学校、小学校同士などをつくる場になっている。

山本委員：学校サイドからの話は興味深い。高山市立東山中学校区は、小学校で2つ、中学校で1つの学校運営協議会をもっている。そして、6つのまちづくり協議会と5つの小学校で「つながりの会」があり「絆会議」と似ている。いいなと思ったところ5点。

①参画する場に子どもと大人と一緒にいて、子どもが参画できるベースがある。②アクティブラーニングを取り入れている。③小中が連携した挨拶活動がある。④データアンケートで検証し、PDCA サイクルで回っている。⑤タブレット活用した通信がある。二次元コードを使って、防災訓練でシェイクアウトの動画を広報したり、150周年の言葉を聞けるようにしたりした。ICTは広報という意味ではとても活用できる。ほかほかリレーもよい。学校サイドでも温かいまちづくり、地域づくりを考えているところがすばらしい。子ども中心にというところがぶれないところもよい。

自身は地域コーディネーターをしている。地域コーディネーターはどのような活動をされているのか。

酒井委員：地域コーディネーターだから何かをと実際にはお願いできていない。白川郷学園の地域コーディネーターの話を聞いたが、地域コーディネーターがいることで地域と学校が結びつきやすいと感じた。まだ羽島はできていない。コーディネーターの仕事が明確にない。地域からなのか学校からなのかどこからお願いなのか。学校と地域をコーディネートするのは大変だが大切なことである。

堀江委員：地域活動の持続可能性が大切だと考える。社会の循環を継続していこうと考えた時に、個人で活動をしていると、自分と縁のある子どもたちとの関わりだけが増えていくということになりかねない。そんな中で、学校運営協議会の中で学校主体で、子どもが関わられるような環境があることはとても貴重である。大きな課題があった時にはなく日常から中学校区地域の集まりがある環境があることがよい。

モア絆会議のファシリテーションはだれか。行政か、学校か、地域コーディネーターか。

酒井委員：スタート時は、加配の学校職員が主導した。加配がなくなり、小学校で二人教頭配置のところの方をお願いした。負担のないよう、運営協議会長とも相談しながら進めている。このような仕事ができる加配があれば学校としては運営しやすいが、難しい。

益川議長：コーディネーターのような人が機能すれば、地域の側が主導する動きが出てくるのではないか。モア学園のコーディネートをされている会長のように、地域にも学校にも通じている方が担っていることが、地域の側で進んでいくことになり、社会教育ということを考えてるととてもよいかたちである。

猿渡委員：PTAの立場では、絆会議に子どもたちが入り、子どもというか1人の人としての意見が地域に反映されているのがすばらしい。これができる地域があることに感動した。挨拶は、だれもが話す言葉を考えなくてもできること。挨拶で人と人がつながっていくことが大切なことである。親の立場からすると中学校って、ボランティアなどは調査書のためといったことを言われる人もいる。地域のボランティアを中学生はどうとらえているのか。どれくらいの子が気持ちを前向きに活動に参加しているのか。中学生の気持ちが気になる。そして、その中学生を送り出す保護者の方が、その活動に対してどうとらえているのか知りたい。子どもを通して親も変わっていくきっかけになるのかなと思った。

酒井委員：親さんからの話は聞いたことがない。今度聞いてみたい。

ボランティアは、意欲的に参加してくれているが調査書も否定できない。夏祭りでは、整理券を配るなどボランティアで働く子どもの姿は楽しそうで、役立っている、うれしかったという素直な表情が見られる。挨拶もボランティアもやると気持ちいいなど、良さが感じられているのかなと感じる。参加できない子もいるが、一度参加してその良さを感じた子は何回も参加している。

猿渡委員：子どもたちの姿から、お母さんたちも積極的になってもらえるといい。ボランティアは人のためと言いながら、自分がどうその地域で根差していけるのかといったように、結局は自分に返ってくるものである。そういった視点で子ども大人も行動をとらえていければよいと思った。

益川議長：やってみてわくわくすることが今後のやる気につながる。教育の事後性という。その1歩を全ての子どもにどう勧めるかが大きな課題の1つかもしいないと思った。羽島の活動はある意味限られた子どもだが、今後すべての子どもたちの参画ということはどう考えていくかが大きな点である。

井上委員：今後ごみ拾いもどうかという話があったが、取組として非常にいいなと思った。地域の人と一緒に活動することがきっとハードルを下げる。子どもも近所の人になかなか声をかけづらいところがあると思うが、一緒に何かをすると顔見知りになり、人間関係ができる。草刈りや公民館行事など、それぞれが活動しているものに相乗りしていくと持続可能なものになるのかなと思う。

益川議長：あるもの生かしの考え方である。そして、つながりづくりは地域づくりの基本。そのためには、協働体験、共有体験が必要である。

馬淵委員：新しい協働活動の形を見せてもらった。学校運営協議会から声をかけてもらうとありがたい。瑞穂市巢南では、バザーの売り子など地域のふれあい交流ができています。しかし、コーディネーターをしている方が PTA で、毎年変わったり、忙しかったりと難しい。そういったところを地域コーディネーター、地域学校協働活動を担う人にやっていただくととても助かる。学校の負担、保護者の負担も少なくなり良い関係でできる。モア学園は、元校長が入っているのがいい。学校だけ、地域だけに頼らずどう地域学校協働活動を推進していくのが大きな課題である。

益川議長：羽島市では、コミュニティセンターが非常に大きく学校運営協議会にコミットされているような組織である。そこが地域とつながる 1 つの切り口になっている。地域学校協働活動推進員やコーディネーターなどのつなぐ人、前期の社会教育委員の会の審議テーマでは活動を支える「人」を取り上げたが、やはりそのところは変わらず大事であると改めて認識した。瑞穂市は、子ども基本法に先駆けて住民自治基本条例の中に「子どもの参画」という条文も入れられて先進的に進められている。またその条文に基づいた活動について教えていただきたい。

岩田委員：今まで大人の視点で、大人は子どものために何かやってやりたいという意識があったのかなと思う。絆会議をやることで、大人の意識が「やってやりたい」から「共にやる」とか「共にやりたい」というように大人の方が変わっていることになっているのではないかと感じる。そうすると子どもたちが共に何かやった時に、「ぼくらの地域は大人がちゃんとぼくらの意見を聞いてくれる。」と考え、そういった子どもが根付けば、地域全体が子どもを含めて地域づくりに参画していくようになるのではないかと。公民館の立場でみると、多治見市の根本交流センターとか小泉公民館の館長は、子どもとそこを利用する大人をつなげる活動を考えている。そういう方を増やしていくことを公民館連合会としても提言していけるとよい。私自身が、子どもの願いをどう吸い上げたらよいだらうと考えさせられた。

益川議長：小泉公民館の館長さんは、県の講師派遣事業の講師としても入っているし、小中学生のボランティアをうまく公民館に引き付ける取組をされており、子どもと大人をうまくつなげるキーパーソンである。大人の視点ではなく、子どもと一緒に作り上げていくという方向性が出てきて、主語が「I」から「We」に高まっている印象がある。今回の報告は、今期の審議テーマに合う、示唆に富む発表だった。

「社会教育における子どもを核とした地域づくりの未来～子ども、若者、保護者、地域住民の参画～」というテーマで今後も議論を深めていきたい。現場に役に立つ成果物を作っていきたい。子どもの参画による地域づくりというものが非常にいい形で進んでいくということをモア学園の取組から学ばせていただいた。

議事が終了したため、進行を事務局へお返しする。